

第2単元 単元設定のねらい

単元の構成

配当 時間	「教材名」 ●教材のねらい	学習指導要領の主な指導事項	評価規準	言語活動例
9	「沙石集 児の飴食ひたること」 ●物語を構成する要素を捉える 「説苑 景公之馬」 ●物語の全体構成を捉える 「羅生門」 ●物語の展開を把握する	言葉（言葉の働き）ア 言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解すること。 言語文化（伝統的な言語文化）ア 我が国の言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について理解すること。 言語文化（伝統的な言語文化）イ 古典の世界に親しむために、作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解すること。 読む（構造と内容の把握）ア 文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えること。 読む（精査・解釈）ウ 文章の構成や展開、表現の仕方、表現の特色について評価すること。	・言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解している。 ・我が国の言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について理解している。 ・古典の世界に親しむために、作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解している。 ・文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えている。 ・文章の構成や展開、表現の仕方、表現の特色について評価している。	・読むイ 作品の内容や形式について、批評したり討論したりする活動。 主体的に学習に取り組む態度 ・各教材の「学習指導要領の指導事項」のページに掲載しています。

単元の概要と設定の意図

第2単元の単元名と単元目標は次の通りである。

- ▼単元名 物語は無限に展開する
- ▼単元目標 構成や展開について考える

この単元名・単元目標を支えるコンセプトは次の通りである。

物語や小説には、時間と空間、登場人物が設定され、登場人物のおかれている状況や人物像、登場人物相互の関係が設定される。このような構成の上に立って、次々とできごとが生起し、登場人物の心情や考え方の変化、登場人物相互の関係の変化など、展開が描かれていく。物語や小説を楽しむで読み、自分自身に引きつけて考え、それを表現できることは、文学的な教材が目指す目標の一つである。そのために、構成と展開を捉え、その意味を読み解き、時にはその中に埋め込まれている伏線などのしかけや、人の生き方に対する問題提起を掘り起こしていくことは、読む能力の向上にとって有意義なものになるだろう。さらにそれらのもつ意味を解釈しようとするのが、主体的に読む力を広げていくことにつながるだろう。

以上のような単元の考え方に基づいて、「物語の構成や展開」について考えることにふさわしい中心教材を、それぞれ次のようなねらいをもって配列した。

●第1教材（沙石集 児の飴食ひたること）⇨古文の説話を通して、登場人物

の設定やその考え方の特徴、物語の展開のおもしろさについて考えること。
 ●第2教材（説苑 景公之馬）⇨漢文の説話を通して、時空や登場人物の構成を捉え、物語の展開を全体として把握すること。

●第3教材（羅生門）⇨現代の小説を通して、物語の登場人物や展開の特性、登場人物相互の関係と心情の変容について考えること。

この三教材を通して、物語や小説の構成・展開を読み解くことをねらいとしている。そのため、単元扉には学習者の問題意識を喚起するために、次のような呼びかけを記した。

物語や小説を読んで、その展開に驚いたり、夢中になったりしたことがあるだろうか。作品の構成や展開に着目して、読み深めよう。

以上のような単元の考え方と中心教材の配置に基づいて、第2単元では、主に、次のような資質・能力の育成を目指している。

○物語や小説の中に設定されている時空や登場人物などの構成と、できごとの展開のおおよそを捉えることができる。

○物語や小説に現れる登場人物の人物像の特徴や、展開の特異性を捉えることができる。

○物語や小説の構成・展開のおもしろさや作者のしかけ、問題提起について考え、考えたことを自分の言葉で表現することができる。

第2単元
第1教材

沙石集

— 児の飴食ひたること —

◆無住

採録のねらい

●資質・能力の観点から

物語を構成する要素を捉える

高等学校国語科学習指導要領における「言語文化」科目の「B読むこと」にある、「ア 文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基的に確に捉えること。」の指導事項を達成するために、『沙石集』から一話を取り上げる。説話文学は「まず時、場所、登場人物などを紹介、できごとの経緯をたどり、必要に応じて感想、批評の辞句を添える」（『日本大百科全書』）という形式が一般的であるため、これらを丁寧に読み取るとともに、物語の構成要素について考え、そこで得たものを日常の読書や映画鑑賞などに活かすことができるようになることを目指す。

●テーマの観点から

『沙石集』は鎌倉時代の説話集である。説話は口承されてきた短い話を文字化したもので、その内容は多岐にわたる。『枕草子』が王朝貴族文化を表しているとするれば、説話は各地で連綿と受け継がれてきた民衆の文化を表しているといえよう。この文字化される前の口承文学も大切な言語文化であることを押さえておきたい。なお、「児の飴食ひたること」は狂言「附子」のもとになった話であり、後に「一休咄」としても伝えられたため、広く人口に膾炙している。『日本昔話事典』では「飴は毒」という型に分類される。

▼中心となる学習方法・学習活動

人物設定を整理し、話し合うことを通して、物語を構成する要素を捉えよう。

「児の飴食ひたること」では、「坊主」と「児」がそれぞれどのような人物であるかを読み取り、意見を交わし合うことを学習の中心におく。その際には、「坊主」の発言の意図や「児」の言動の意図について丁寧に読み取ること、説話にはつきものである末尾の評語について吟味することが大切である。さらに、物語のおもしろさを引き出す構成要素について、どのようなものがあるか考えることを行う。これまでは無意識に読み進めている物語について、どのようなところに注目すると理解が深まるのか、いっそう楽しめるのか、という気づきを得られるようにしたい。

また、古文を読むための学習活動としては、音読を中心とする歴史的仮名遣いの学習、古語辞典を活用した古今異義語や古文特有語の学習に加えて、用言と活用、係り結びの理解を目標とする。教科書資料編の「古文のきまり」（275ページ）や「基本古語辞典」（284ページ）を参照しつつ、繰り返し活用表を書き、声に出して唱えることで、古文の響きやリズム、言葉づかいを身体的になじませたい。

教材の概要

●成立

無住一圓が編んだ仏教説話集、十巻。「させきしゅう」とも読む。弘安二（一二七九）年〜同六（一二八三）年に書かれた。巻五までは比較的相違も少なく、巻一の序文と巻五の結語には対応関係もみられ、おそらく当初はここまでと考えて構想されたものと思われる。その後、数年放置された後に巻六以降が書かれたが、さらに筆者自身によって添削加除が行われたため、伝本によって記載内容にかなりの違いがある。書名は「砂（沙）や石のような世俗的な話を集めて、金のような仏教の教理を見いだす」という意味でつけられたと考えられている。

●構成

巻一・和光垂迹としての神明説話、巻二・諸仏菩薩の靈験譚、巻三・偏執否定の仏法・修道論、巻四・偏執否定と当代仏教諸宗の動向、巻五・和歌陀羅尼説と歌徳説話、巻六・説教師と説法説話・邪命説法の戒め、巻七・正直・忠孝・義・礼などの教訓説話、巻八・嗚呼・慳貪と執着説話、巻九・嫉妬・殺生等の妄念妄執説話、巻十・真の求道者と越格の境地（『新編日本古典文学全集52 沙石集』解説による）。民衆教化のための話が多いが、滑稽譚や艶笑譚なども含まれている。

●特徴

先行する説話集が古きよき時代を懐かしみ、王朝の美意識を回顧する傾向にある中、『沙石集』は同時代の説話、民衆に近い説話が多く、無住が暮らした尾張国を行き来する人々から聞き取った説話など、地方庶民の生活にまつわる話も少なくない。文体も他の説話集に比して平俗であり、当時の社会の一面をよく伝えている。中には後世の笑話の種となったものもあり、『さふはけふの物語』などの滑稽文学の先駆ともいえる。

●要旨

ある山寺にけちな坊主がいて、飴を一人で食べて児には「食べる」と死ぬ」と言っていた。坊主が外出した時に児は飴を食べ、秘蔵の水瓶を割っておいだ。坊主が帰ると児は泣きながら「水瓶を割ってしまったので死のう」と思い、死ぬと言われたものを食べた」と言った。坊主に得るものはなく、児の知恵は尋常ではなかった。

●筆者

無住（むじゅう 一二二六年〜一二三二年）
鎌倉時代後期、臨済宗東福寺派の僧。字は道暎、一円房ともいう。鎌倉に生まれ、梶原景時一族であったともいわれる。幼少期に父母と死別したらしく、十五歳で下野へ、十六歳で常陸へと身を寄せ、十八歳で得度した。その後、律宗、禅宗、真言宗など各宗を学ぶ。弘長2（一二二六）年、尾張の長母寺の住職となり、半世紀にわたり民衆の教化に努めた。『沙石集』のほか、『聖財集』三巻、『妻鏡』一卷、『雑談集』十巻を編んだ後、桑名の蓮華寺で没した。

●出典

渡邊綱也校注『日本古典文学体系85 沙石集』（岩波書店 一九六六年）を
出典とした。
主底本広本系の梵舜本である。その他に米沢本、略本系の古活字本などがある。広本を改編・簡略化したのが略本であると考えられ、両者の間には説話数をはじめとして大きな相違がある。

●中学校国語教科書（令和三年度版）での掲載状況
古典説話の掲載は、現在は、ない。

学習指導の展開

●学習指導要領の指導事項（育成すべき資質・能力）

知識及び技能

言語文化イ 古典の世界に親しむために、作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解すること。

思考力・判断力・表現力等

読むア 文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えること。

●観点別の評価規準

知識・技能

・古典の世界に親しむために、作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解している。

思考・判断・表現

・文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えている。

主体的に学習に取り組む態度

・古典の世界に親しむために、作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解したり、文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えたりすることにに向けた粘り強い取り組みを行うとともに、自らの学習を調整しようとしている。

学習指導案

〇〇高等学校国語科 〇年〇組
授業者 〇〇〇〇

1. 学習活動 物語を構成する要素を捉えよう
2. 教材名 『沙石集』（「児の飴食ひたること」）
3. 学習目標 『沙石集』に描かれている人物設定を読み取り、内容や構成、展開を的確に把握することができる。また、語り継がれ読み継がれてきた説話を読むことで、言語文化の担い手としての自覚を持つことができる。
4. 評価規準

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
評価規準	古典の世界に親しむために、作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解することができる。（言語文化イ）	文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えることができる。（読むことア）	古典の世界に親しむために、作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解したり、文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えたりすることにに向けた粘り強い取り組みを行うとともに、自らの学習を調整しようとしている。
観点別評価の実際	作品の背景について理解し、自らも語り継がれた文学の受け手であることを認識している。＜記述の確認＞	本文の叙述を基にして、人物設定を自分なりにまとめている。＜記述の確認＞	物語の構成要素について意見交流し、他の物語にあてはめるなど、発展的に考察しようとしている。＜行動の観察＞

5. 授業の展開（3時間）

時	学習活動	評価
1	説話文学が語り継がれた文学であることを理解する。また、全文を音読し、歴史的仮名遣いや古文のリズムに親しむとともに、話の概要を把握する。	【知識・技能】 作品の背景について理解し、自らも語り継がれた文学の受け手であることを認識している。＜記述の確認＞
2	それぞれがどのような人物として設定されているかをまとめ、グループで意見を交流するとともに、人物を批評的に捉えなおす。	【思考・判断・表現】 本文の叙述を基にして、人物設定を自分なりにまとめている。＜記述の確認＞
3	物語のおもしろさを引き出す構成要素について考え、グループで意見を交流する。また、そこで得られた結論を身近な物語にあてはめて考えてみる。	【主体的に学習に取り組む態度】 物語の構成要素について意見交流し、他の物語にあてはめるなど、発展的に考察しようとしている。＜行動の観察＞

●学習指導案例（3時間扱い）

●学習指導のポイント例（1分冊①「総説編」50ページ参照）

(1) 「読解力の育成」を踏まえた指導方法の視点
人物設定をpushし進めることによって、「①目的に応じて理解し、解釈する能力の育成」を図るとともに、それぞれの人物について「②評価しながら読む能力の育成」を目指す。

(2) 「言語能力の育成」を踏まえた指導方法の視点

歴史的仮名遣いや助詞の省略といった古文の特徴を踏まえて音読することによって、「③言語文化に関する理解」を深めるとともに、「⑤言葉によって感じたり想像したりする力、感情や想像を言葉にする力」を育成し、これまでに語り継がれ読み継がれてきた説話というものに思いを致し、「⑬言語文化の担い手としての自覚」を深めることを目指す。

(3) アクティブ・ラーニングの手法を取り入れた指導方法の視点

「④グループディスカッション」を取り入れて、人物設定について意見を出し合って交流し、理解を深める。また、物語をおもしろくする構成要素にはどのようなものが考えられるか、意見交流をする。

●指導展開例

第1時限		時間
<p>本時のねらいと学習課題</p> <p>・説話文学が語り継がれた文学であること を理解する。また、全文を音読し、歴史的仮名遣いや古文のリズムに親しむとともに、話の概要を把握することができる。</p>		<p>本時のねらいと学習課題</p> <p>・説話文学が語り継がれた文学であること を理解する。また、全文を音読し、歴史的仮名遣いや古文のリズムに親しむとともに、話の概要を把握することができる。</p>
<p>評価と 方法</p>	<p>知識・技能</p> <p>・作品の背景について理解し、自らも語り継がれた文学の受け手であることを認識している。(記述の確認) (支援) C 評価の生徒への手立て ・口承文学・説話文学・伝統芸能・それらの受け手である自分を図式化して理解させる。</p>	<p>学習活動と指導内容</p> <p>1 『沙石集』を例にして、説話文学が成立した背景を知る。 2 全文を音読する。 ○歴史的仮名遣いを正しく読む。 ○助詞の省略や係り結びなどから生じる古文特有のリズムを味わう。 3 話の概要を把握する。 ○主語を確認しながら、人物の行動を把握する。 ○古文特有語や古今異義語の意味を確認する。必要に応じて古語辞典で調べる。 ○係り結びについて理解する。(古文を読むために②) 4 「コラム」を読み、現代との関わりについて考える。</p>
<p>評価と 方法</p>	<p>知識・技能</p> <p>・作品の背景について理解し、自らも語り継がれた文学の受け手であることを認識している。(記述の確認) (支援) C 評価の生徒への手立て ・口承文学・説話文学・伝統芸能・それらの受け手である自分を図式化して理解させる。</p>	<p>指導上の留意点</p> <p>・口承文学として民間に受け継がれてきた話を集めたものであることを、「枕草子」などと比較しつつ理解させる。 ・歴史的仮名遣いに注意させる。 ・語句の切れ目を意識しつつ読ませる。 ・格助詞「が」「の」に注意して主語を読み取らせる。 ・動詞や形容詞は基本形で、形容動詞は語幹で調べるように指示する。 ・係り結びに印をつけさせる。 ・絵本や紙芝居など、昔から伝えられてきた話にまつわる経緯について意見交流する。</p>

第2時限		時間
<p>本時のねらいと学習課題</p> <p>・それぞれがどのような人物として設定されているかをまとめ、グループで意見を交流するとともに、人物を批評的に捉えなおすことができる。</p>		<p>本時のねらいと学習課題</p> <p>・それぞれがどのような人物として設定されているかをまとめ、グループで意見を交流するとともに、人物を批評的に捉えなおすことができる。</p>
<p>評価と 方法</p>	<p>知識・判断・表現</p> <p>・本文の叙述を基にして、人物設定を自分なりにまとめている。(記述の確認) (支援) C 評価の生徒への手立て ・交流した他の生徒の意見のうち、どれが一番納得したかをまとめさせる。</p>	<p>学習活動と指導内容</p> <p>導入</p> <p>1 全文を音読し、概要を復習する。</p> <p>展開1</p> <p>2 「羅針盤 課題1・課題2」に取り組み。 ○坊主と児の発言をもとに、人物設定を考える。 ○坊主が外出した後の児の行動の意味を理解する。 ○語り手の児に対する評価を読み取る。</p> <p>展開2</p> <p>3 「羅針盤 協働的な学びのために」に取り組み。 ○ワークシートに坊主と児の人物設定をまとめる。 ○同じく坊主と児についてどう思うかをまとめる。 ○グループで人物について意見を交流する。</p> <p>まとめ</p> <p>4 意見を共有する。 ○グループごとに人物設定について発表する。 ○グループごとに人物についてどう思うかを発表する。</p>
<p>評価と 方法</p>	<p>知識・判断・表現</p> <p>・本文の叙述を基にして、人物設定を自分なりにまとめている。(記述の確認) (支援) C 評価の生徒への手立て ・交流した他の生徒の意見のうち、どれが一番納得したかをまとめさせる。</p>	<p>指導上の留意点</p> <p>・歴史的仮名遣いや語句の切れ目を意識させる。 ・「慳貪」が仏教では罪にあたることを紹介する。 ・水瓶を割った理由を説明させる。 ・「ゆゆし」の意味を確認させる。 ・説話にどのように描かれているかを考えさせる。 ・その人物を自分がどのように思うかを考えさせる。 ・他のグループの発表をもとに、自分のまとめを修正させる。</p>

ん。「候へ」は丁寧の補助動詞で、話し手である児から聞き手である坊主への敬意。「ども」は逆接確定条件の接続助詞。「おほかた」は打消の助動詞「ず」と呼応して「いっこうにない」などと訳す陳述の副詞。飴を食べてから水瓶を割ったのだが、水瓶を割ったおわびに死のうとして飴を食べたことにしている。↓発問

4 果ては あげくのはてには。「果て」は「最後」の意。

4 小袖につけ、髪につけてはけれども 小袖につけ、髪につけておりますが。「はべれ(侍れ)」は丁寧の補助動詞で、話し手である児から聞き手である坊主への敬意。飴をこぼした時についたのだが、死ぬために飴をつけたことにしている。↓発問

5 いまだ死に候はず まだ死にません。「候は」は丁寧の補助動詞で、話し手である児から聞き手である坊主への敬意。

5 とぞ言ひける と言った。「ぞ」は強意の係助詞、「ける」は過去の助動詞「けり」の連体形で「ぞ」の結び。児の言葉を強調することで、そのしたたかさを称えている。

6 飴は食はれて、水瓶は割られぬ 飴は食われて、水瓶は割られてしまった。「れ」はどちらも受身の助動詞「る」の連用形、「ぬ」は完了の助動詞「ぬ」の終止形。水瓶を割られたのは坊主にとって意図しないことなので「ぬ」が使われている。

6 慳食の坊主、得るところなし けちな坊主は、得るものがない。「慳食」はナリ活用の形容動詞「慳貪なり」の語幹。連体修飾格の「の」を伴って「坊主」に連体修飾している。「ところ」は形式名詞で「とき、こと、もの」などの意を表す。飴を惜しんだために水瓶まで失った坊主を通して、自らの慳貪さは自らにはね返ることを説き、慳貪であってはいけないと戒めている。↓脚問

7 児の知恵ゆしくこそ 児の知恵は尋常ではない。「ゆしく」は、良くも悪くも程度が甚だしいことと、「恐れ多い、不吉だ、尋常でない」の意。ここでは坊主と対比しながら、尋常でなくすぐれているとほめている。「こそ」は強意の係助詞で、結び「あれ」が省略されている。↓発問

7 学問の器量も、むげにはあらかし 学問の才能もきつと並大抵ではないことだろうよ。「学問」は、ここでは仏典に関わる教養を指す。「器量」は「才能」の意。「むげに」はナリ活用の形容動詞「むげなり」の連用形で、まったくひどいさまを表す。「あら」は補助動詞、「じ」は打消推量の助動詞「じ」の終止形、「かし」は念押し終助詞。否定的表現の「むげなり」に「あらじ」が続くことで二重否定となり、逆に強い肯定、すなわちすぐれているという意味の表現になっている。

「羅針盤」の解説

課題1 坊主が「これは人の食ひつれば死ぬる物ぞ。」(58・3)と述べたのはなぜか、考えよう。

▼課題解決例

- ・食べると死ぬものだと行って脅かして、児に飴を食べられないようにしようと考えたから。
- ・飴を一人で食べるために、児には食べられないものだと思うせよと考えたから。

【課題設定のねらいと解説】

坊主の人物設定を読み取る。坊主については「慳貪なりける」と説明してあるがそれが「ただ一人食ひけり」「一人ありける小児に食はせずして」という記述に表れていること、飴を食べられないように児を脅していることを読み取らせる。

物語において、冒頭部分はさまざまな設定が提示される部分であり、ここでは場所の設定として「ある山寺」、人物の設定として「慳貪なりける」坊主が紹介される。そして坊主が常々「これは人の食ひつれば死ぬる物ぞ」と言っていたことが、この後の展開に大きな意味をもつ。その意味では、人物設定であると同時に状況設定としても機能していると言える。

完了の助動詞「つ」が意識的な行動に用いられることを踏まえれば、これは児が食べようとすることを想定した言葉である。また、「ば」「す」と必ず」という恒常条件を表していることも押さえておきたい。

また、この言葉は児が飴を食べた言い訳にも利用されているので、物語の伏線としても重要な意味をもっている。

ために食べたと言われたのでは坊主も言い返せない。

問 「得るところなし」(6)とはどのような意味か。

・飴を惜しんだために水瓶まで失い、けちをして得るものは何もなかったということ。

(解説) 慳貪さは自らにはね返ることを述べ、戒めている。

問 語り手は児の知恵をどう評価しているか。

・尋常ではなくすぐれたものだと評価している。

(解説) 「ゆしく」は良い場合にも悪い場合にも使うが、ここではほめている。

課題2 児が、「あはれ、食はばや、食はばや」(58・4)と思っていたのはなぜか、考えよう。

▼課題解決例

- ・坊主の言葉が嘘であることを見抜き、それが飴であることに気づいていたから。
- ・坊主が食べていることを知っていて、それを食べても死なないとわかっていたから。

【課題設定のねらいと解説】

児の人物設定を読み取る。坊主の「食べると死ぬ」という言葉の後に「食はばや」と続いていることから、坊主の言葉を信じていないことは明らかである。児をだませていると思っっている坊主と、はなから坊主の嘘を見抜いている児という対照的な人物設定を押しえることが、この文章を読む上で肝の部分である。

なお、物語を読むうえで、

- (1) 語り手のみが知っていること
- (2) 語り手と読者が知っていること
- (3) 語り手も読者も登場人物も知っていること

児が坊主の嘘を見抜いていることは(2)にあたり、坊主はそのことに気づいていない。ゆえに読者は、児の目線に立ちつつ、坊主を観察するように読むことができるのである。

第2単元
第2教材

説苑

景公之馬

◆劉向

採録のねらい

●資質・能力の観点から

物語の全体構成を捉える

高等学校国語科学習指導要領における「言語文化」科目の「B読むこと」にある「ア 文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えることができる。」及び、「伝統的言語文化」の「ア 我が国の言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について理解することができる。」の指導事項を達成するために『説苑』から採録した。ただし、内容の理解を深めるためには漢文の基礎事項の理解も必要となるため、「伝統的言語文化」の「ウ 古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや訓読のきまり、古典特有の表現などについて理解すること」も意識していく。

●テーマの観点から

この『説苑』第九篇「正諫」は臣下が君主の過つた行いを諫めた事例集である。君主の過ちを正すのが臣下の役目であり、また、各国の君主が思想家を招聘したのは己の過失を正すためだが、歴史上の王にとっても、現代に生きる私たちにとっても、過誤を認めること、そのうえで行いを改めることは容易ではない。どう伝えれば諫言が相手に届くのか、晏子の説得をどう感じたかなど自分の考えをまとめ、相互に意見交換できるようにすることを目指す。

していきたい。

▼中心となる学習方法・学習活動

人物の言動を整理し、紹介し合うことを通して、物語の全体構成を捉えよう。

漢文学習はともすると句法・語法の習得に偏りがちだが、ここでは句法は内容を理解するために最低限を取り扱うこととし、内容理解とそれについて自分なりの考えをもつこと、さらにはそれを相互に交換することで理解を深めることを中心に据えたい。

また、漠然と「言動を整理し、紹介し合う」と指示されても学習者の混乱があると思われるため、学習者の思考を整理するために授業ではなるべく発問事項を明確にする必要があるだろう。

教材の概要

●作品

『説苑』は春秋時代から漢代までの故事説話集。優れた人物の逸話が集められており、儒家思想が根底にある。漢の劉向によって編纂され「新序」ともに皇帝の教育に用いられた。もともとあった『説苑雜事』という書物に劉向が手を加えて内容を整理し、大幅に増補を加えて各篇に序文をつけた。全20篇（君道・臣術・建本・立節・貴徳・復恩・政理・尊賢・正諫・敬慎・善説・奉使・權謀・至公・指武・談叢・雜言・弃物・修文・反質）

●時代背景
「春秋時代」

前七七〇年、統制力を失いかけていた周の王室は、犬戎の侵入を受け、平王が都を東の書の洛邑（現在の洛陽）に移した。それ以後、秦の始皇帝が天下を統一するまでを、東周時代という。この東周時代を普通、前期を春秋、後期を戦国の二つの時代に分ける。

春秋時代の初めに諸侯は王室の統制を離れて互いに争っていたが、その間に、周辺に斉・晋・楚などの有力な諸侯が出現した。名目的には、周の宗室権は認められていたが、実質的には、斉の桓公、次いで晋の文公などの「覇者」が諸侯を統制していった。後に覇業を成し遂げた、宋の襄公・秦の穆公、楚の荘王を合わせて、「春秋の五霸」という（他説もある）。それぞれが天下に号令しようと、血みどろの抗争を繰り返した。中でも呉・越の争いは激烈をきわめた。

春秋時代は、以上のように強国が出現しても、依然として民族的血統主義が残っていて、礼の秩序が存していたのだが、末期になると諸侯の権威は衰え、その下の卿・大夫が実権を握るようになった。晋では、前四〇三年、卿であった韓・魏・趙の三氏が分立して諸侯に列した。この年を、春秋時代と

戦国時代の境としている。

●要旨

景公は自分の馬を死なせた飼育係の役人を殺そうとしたが、晏子は景公に代わって飼育係の罪状を並べ立てて飼育係に罪を理解させようと、罰を与えることを申し出た。

飼育係を責めているようにみせかけて、晏子の真意は景公に飼育係の処罰をやめさせることにあった。景公は晏子の飼育係への言葉から己の非に気づき、自らの名誉を守るために飼育係を釈放した。

●作者
劉向（りゅうきょう）

前七七〇前六。前漢の思想家。字は子政。初名は更生。広く学問を修め各学派に通じていたことから、成帝の命を受け子の劉歆とともに宮中の図書を整理・校訂し、解題を加えた。この業績によって劉向は中国目錄学の祖といわれる。著書に『新序』『戦国策』『列女伝』がある。

●出典

『説苑』第九篇正諫
本文は『説苑』（講談社学術文庫 二〇一九）による。

●中学校教科書（令和三年度版）での掲載状況

『説苑』を出典とした教材はないが、故事成語に関連した教材としては、次のものが掲載されている。

「矛盾」三省堂・東京書籍・教育出版・光村図書（いずれも1年）
「助長」教育出版（1年）

学習指導の展開

●学習指導要領の指導事項（育成すべき資質・能力）

知識及び技能

言語文化ア 我が国の言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について理解すること。

思考力・判断力・表現力等

読むア 文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えること。

●観点別の評価規準

知識・技能
・我が国の言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について理解している。

思考・判断・表現
・文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えている。

主体的に学習に取り組む態度

・我が国の言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について理解したり、文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えたりすることにに向けた粘り強い取り組みを行うとともに、自らの学習を調整しようとしている。

学習指導案

〇〇高等学校国語科 〇年〇組
授業者 〇〇〇

1. 学習活動 人物のセリフを整理し、発言の意図を考えよう
2. 教材名 『説苑』景公の馬
3. 学習目標 登場人物の言動を整理し、人物の発言の意図を理解することができる。また、その発言についての感想や意見をまとめ、述べ合うことができる。
4. 評価規準

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
評価規準	我が国の言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について理解している。（言語文化ア）	文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えている。（読むことア）	我が国の言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について理解したり、文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えたりすることにに向けた粘り強い取り組みを行うとともに、自らの学習を調整しようとしている。
観点別評価の実際	漢文の文法事項を整理し、適切な書き下し文を書き、現代語訳している。 <記述の確認> 漢文の訓読特有のリズムや語感を理解し、正確に音読している。<行動の観察>	登場人物の言動をそれぞれ整理し、人物の発言の意図を理解することができる。 <記述の確認>	人物の発言について理解したことをまとめ、それについての意見や感想をグループ内で発表し合おうとしている。<行動の確認>

5. 授業の展開（3時間）

時	学習活動	評価
1	本文を音読し、正しく訓読できるようにする。 再読文字と難読漢字を確認し、本文の内容理解を進める。	【知識・技能】 漢文の文法事項を整理し、適切な書き下し文を書き、現代語訳している。<記述の確認> 漢文の訓読特有のリズムや語感を理解し、正確に音読している。<行動の観察>
2	使役の助字の役割・禁止の副詞を確認し、本文の内容理解を深める。 登場人物を確認しセリフを列記し整理する。 整理したセリフから発言者の意図を想像し、まとめる。	【思考・判断・表現】 登場人物の言動をそれぞれ整理し、人物の発言の意図を理解することができる。 <記述の確認>
3	晏子の発言の意図、景公が圉人を許した理由を考え、自分なりの評釈を加えて意見及び感想を交流する。	【主体的に学習に取り組む態度】 人物の発言について理解したことをまとめ、それについての意見や感想をグループ内で発表し合おうとしている。<行動の確認>

●学習指導案例（3時間扱い）

●学習指導のポイント例（↓分冊①「総説編」50ページ参照）

(1) 「言語活動の充実」を踏まえた指導方法の視点
登場人物の言動をまとめる過程で「方法③概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする」や「目標①事実等を正確に理解すること」、「目標③事実等を解釈し、説明することにより自分の考えを深めること」の実現を目指す。

(2) 「言語能力の育成」を踏まえた指導方法の視点
漢文の基本的な句形を学び訓読をする過程で「①言葉の働きや役割に関する理解」を促し、登場人物の言動からその意図を考えたり、それに対する自分の考えを書きあらわすことよって「⑤言葉によって感じたり想像したりする力、感情や想像を言葉にする力」及び、「⑩自分のものの見方や考え方を広げ深めようとする態度」の育成を目指す。

(3) アクティブ・ラーニングの手法を取り入れた指導方法の視点
「⑨プレゼンテーション」を取り入れて、登場人物の言動からその人柄を考え、それについて自分なりの評価を述べ合い、意見交流をする。このことを通して、自分の考えを伝え、相手の話を理解し、相互に教材理解の深化を図る態度の育成を目指す。

●指導展開例

時間	本時のねらいと学習課題	学習活動と指導内容	指導上の留意点
第1時限	<p>・再読文字・使役の助字・置き字などの文法事項を確認し、本文を正しく調読して内容を理解することができる。</p> <p>【学習課題】</p> <p>・調読の基本事項を学び、音読を通して漢文のリズムを体感しよう。</p> <p>・登場人物と歴史背景を学ぼう。</p>	<p>1 教科書上段・中段・下段がそれぞれ調読文・書き下し文・現代語訳になっていることを確認し、調点の種類を理解する。</p> <p>2 教科書上段の調読文中にある文法事項を確認する。 ○再読文字「將にす」の含まれた文を書き下し、訳を確認する。 ○「而」「於」「也」は置き字で書き下しに影響しないことを確認する。</p> <p>3 中段の書き下し文を音読する。</p> <p>4 登場人物や歴史的な背景を確認する。景公・晏子・圉人の身分差に注目し、人物の関係を理解する。</p> <p>5 教科書上段の調読文にある難読漢字や語句を拾い、下段の現代語訳と見比べて語句の意味を理解し、本文全体の内容理解への一助とする。</p> <p>【知識・技能】</p> <p>・漢文の文法事項を整理し、適切な書き下し文を書き、現代語訳している。(記述の確認) ・漢文の調読特有のリズムや語感を理解し、正確に音読している。(行動の観察) ・(支援) C 評価の生徒への手立て ・何度も声を出して読ませることでリズムを体感させ、本文理解につなげる。</p>	<p>・漢文の表記に関する3種類の文、3種類の調点(読み仮名をいれて4種)を説明する。</p> <p>・基本的な語法・句法に注目させる。七種の再読文字に触れることよって授業時間が圧迫される場合は、本文中の「將にす」にのみ触れ、あとはワークシートなどを使って授業時間外での活動にするなどの工夫が必要。朝三暮四P35の6行めにも同じ再読文字がある。</p> <p>・範読に続いて斉読を行うなど、正確に音読させる。</p> <p>・景公や晏子がいた春秋時代の中国の列国の位置・斉の位置を、地図を使って示し、春秋時代の状況を簡単に説明する。三人の登場人物の身分を理解させる。</p> <p>・「援る」「數む」「釈す」などの動詞の読みに注意し、意味を理解させる。</p>

時間	本時のねらいと学習課題	学習活動と指導内容	指導上の留意点
第2時限	<p>・本文の内容を理解・整理し、登場人物の発言の意図を理解することができる。</p> <p>【学習課題】</p> <p>・句法の基本事項を学び、漢文の表現を案しよう。</p> <p>・登場人物の言動を整理し、そこに込められた意図を考えよう。</p>	<p>1 教科書上段の調読文中にある文法事項を確認する。 ○助字「使」に注目し、「人にしをさせる」という使役の訳を確認するとともに、動作の主体・客体、登場人物の関係を確認する。 ○禁止の副詞「勿」に注目し、下の動詞を強く否定していることを確認するとともに、景公が強く否定しなかった事柄を理解する。</p> <p>2 前時の復習として春秋時代がどのような時代であったかを振り返る。</p> <p>3 「羅針盤 課題1・2」に取り組み。 ○晏子の言葉を整理し、圉人の罪を理解する。</p> <p>4 景公の目の前で圉人の罪を数え上げ、圉人に聞かせることにはどのような意味があるのか考える。</p>	<p>・基本的な語法・句法に注意させる。ただし文法事項の学習はあくまでも文脈理解のために行うので、指導の比重については注意する必要がある。</p> <p>・虎の威を借るのP34の4行めに使役の助字「使」があり、P34の3行めにも「敢へて」をともなった禁止の句法がある。</p> <p>・周王室が統制力を失いかげ、都を洛邑(現在の洛陽)に移した東周時代の前期を春秋時代という。この時代、隙を見れば周辺諸侯に侵略されかねない。領土内の安定と周辺諸侯への警戒が不可欠であった。この時代に宰相として君主を思い、領民を案じる晏子の言動に注目させたい。</p> <p>・「馬を以ての故に」が二度繰り返される理由を考えさせる。晏子は馬の貴重さを理解しているがそれを人間の命と比較し、人の命を奪う価値が馬にあるとは思っていないことを読み取らせる。また、君主といえども、私情で人の命を奪うことは領土の秩序を失うことで、周辺諸侯に軽蔑され、つけ込まれる要因となることを晏子は危惧している。</p> <p>・圉人が既に犯した罪は最初の「つだけ」だけで、晏子が圉人に述べている後の二点は今後起こる可能性のある事柄であり、実際には圉人の罪ではないという点を理解させる。</p>

評価と方法

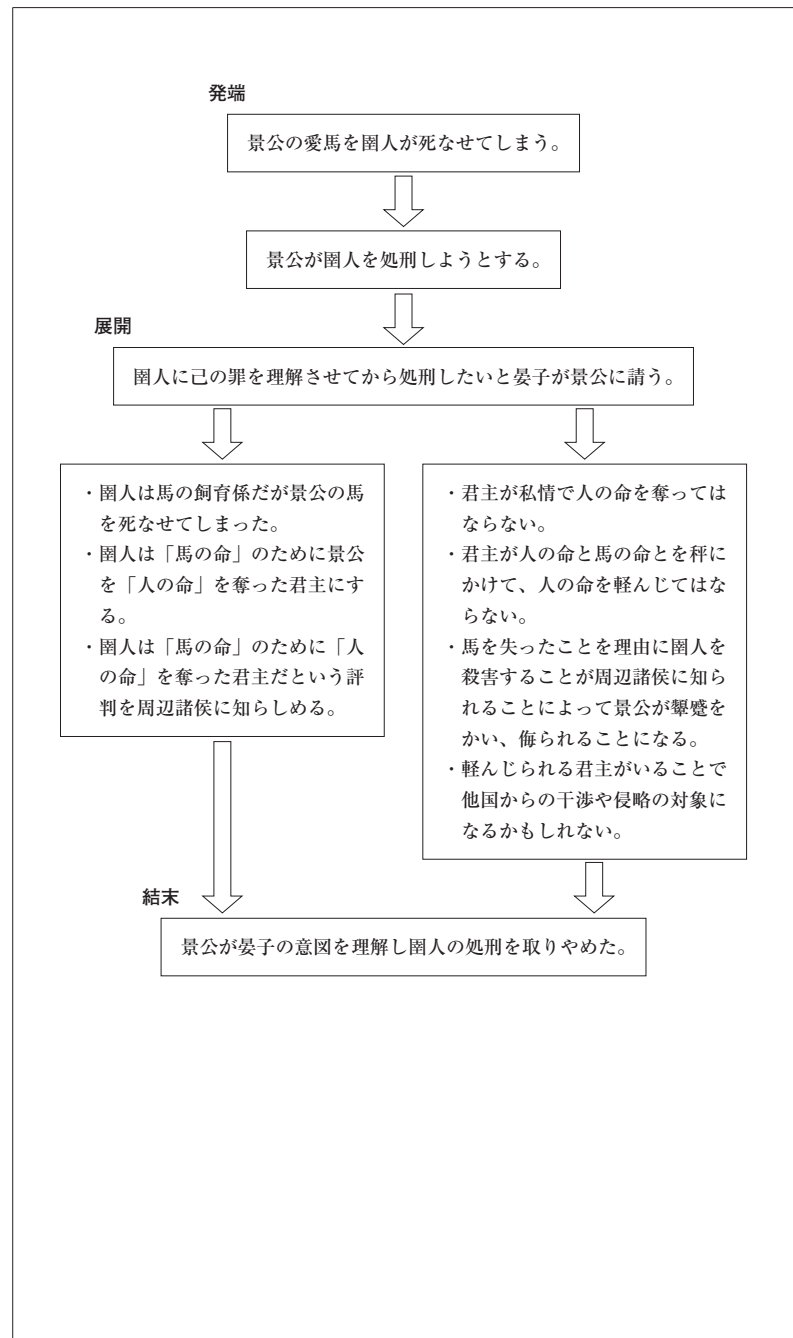
【思考・判断・表現】

・登場人物の言動をそれぞれ整理し、人物の発言の意図を理解することができる。(記述の確認)

【支援】 C 評価の生徒への手立て

・それぞれの発言を、順番通りに簡易書きで列記させる。

●展開図



●語句・文脈の解説

第一段

〔64ページ〕

1 景公。？前四九〇年 春秋時代の斉の君主。齊は現在の山東省にあった国で、周の武王の臣下である太公望（呂尚）が封ぜられた国。都は臨淄（りんし）。『史記』齊大公世家に景公と晏子に関する叙述がある。

1 有馬 馬を持っている。馬を飼っている。「有」は所有を表す。

2 圉人 馬を飼育する人。馬の飼育係を表す周代の官名。

2 殺之 馬を死なせた。「殺」とあるが圉人が君主の馬を故意に殺したとは考えにくく、「死なせてしまった」と理解するのがよい。

3 戈 武器の一つ。長い柄の先にかき型の両刃をつけ、敵を引っ掛けて殺傷する。ほこ。

3 援 手にとる。持つ。

3 将自撃之「将」は再読文字。「将に之を撃たんとす」と訓読し、「今にも殺そうとする」と訳す。「撃」には「突き刺す」、「殺す」の意味がある。

〔65ページ〕

1 晏子。？前五〇〇年 春秋時代の政治家・思想家。名は嬰。字は平仲。齊の靈公・莊公・景公の三代に宰相として仕えた。質素儉約をみずから実行し、博識と合理性、道徳を重視し、君主からの信頼もあつた。晏子の言行録『晏子春秋』がある。春秋時代における最も優れた人物として鄭の子産（しげん）・晋の叔向（しゆくきやう）・呉の季札（きさつ）・衛の蘧伯玉（きよはくきよく）と並び称されている。『説諭語』公治長第五には晏子を賞賛する孔子の言葉がある。また、『説苑』には他にも晏子の活躍が記されている箇所がある。（第二篇臣術・第七篇政理・第十二篇奉使。）

3 臣 わたし。臣下が君主に対してへりくだって使う一人称。

3 請 対話中に用い、相手に対する敬意を含む表現となる。「請ふ」ではじまり、「せん／せんことを」で終わることが多く、自分がある行為をすることの許しを求める。「どうぞ／どうか……させてください」「どうか……するのを許してください」と訳す。

3 数 ひとつひとつ罪状をかぞえ挙げて責めること。

4 令 使役の助字。「使」と同じ使い方をする。「使／令 対象 動詞 目的語」「対象をして 目的語

脚問・発問

● 各ページにある指示語「之」もしくは「此」は何を指すか。

〔64ページ〕

殺之（2）馬。（圉人が馬を殺した。）

撃之（3）圉人。（景公が圉人を殺そうとした。）

〔65ページ〕

此（2）脚問 圉人。

数之（3）圉人。（晏子が圉人を罪状を数え上げて責める。）

〔66ページ〕

殺之（4）圉人。（晏子が圉人を殺そうと思う。）

〔67ページ〕

殺之（5）脚問 圉人。（晏子に命じて景公が圉人を許す。）

● 「臣請（65・3）（臣請ふ）は誰が誰にどんなことを請うのか。またその目的は何か。

● 晏子が景公に圉人に圉人自身の罪を理解させ、死刑を執行することに対しての許可を求めた。圉人に語って聞かせているように見せかけて実は景公が圉人の死刑を取り下げるよう説得することが目的である。

● 晏子は「以馬之故」（66・5、67・1）（馬を以ての故に）と二度繰り返して述べる。

●ワークシート作成例④（第3時限）
問 景公が圉人を許したのはなぜか考えよう。

問 晏子と景公の行動をそれぞれ振り返り、どのような性格かを考え、それ
ぞれの人物をどう思うか自分の考えをまとめよう。

印象・感想	人柄・性格	第三場面	第二場面	第一場面

●ワークシート作成例（解答例）
問 景公が圉人を許したのはなぜか考えよう。

晏子が圉人を責める言葉聞き、それが実際には自分を論ずための言葉だと気がついた。また、その内容から、自分の行動が今後の自国にとって、あるいは自分の評判にとって有益ではないということに気づき、体面を保つために圉人を釈放することにした。

問 晏子と景公の行動をそれぞれ振り返り、どのような性格かを考え、それ
ぞれの人物をどう思うか自分の考えをまとめよう。

印象・感想	人柄・性格	第三場面	第二場面	第一場面

「羅針盤」の解説

課題1 晏子が、圉人とその罪をわからせてから殺させてほしいと願ったのはなぜか、考えよう。

▼課題解決例

- ・ 景公に圉人の処刑を思いとどまらせるため。
- ・ 馬を失って冷静さを失っている景公に、直接的な言葉で処刑をしてはならないと述べてもそれが受け入れられるかどうかはわからない。だから、晏子は一連のできごとの原因、景公が私情で処刑を行った後の社会的な影響、周囲から下される評価を述べることによって景公に冷静さを取り戻させ、圉人を許す方向に導こうと考えたため。

【課題設定のねらいと解説】

愛馬を失ったばかりで感情のたかぶっている景公に直接的な諫言が効果をもたないだろうことを理解させたい。景公の性質と現状とを理解し、景公が納得できる論法で晏子が圉人の「無罪判決」を獲得するために必要な芝居である。内容理解のための発問ではあるが、自分の感情がたかぶっている時に正論の注意を受けた場合、どのような気持ちになるかを学習者に考えさせることも有効であろう。

課題2 晏子が述べた罪とは、どのようなものをかをまとめよう。

▼課題解決例

- ・ 圉人は馬を飼育する官吏でありながら君主の馬を死なせてしまった罪。
- ・ 圉人が景公に「馬を理由に飼育係を殺させる」罪。

・ 圉人が景公を「馬を理由に人を殺した君主だと周囲の諸侯に知らしめる」罪。

【課題設定のねらいと解説】

文法事項として使役の構文が二度使われていることを理解させたい。圉人の行いが君主の名声を損なわせることが罪だと言っている。圉人が馬を死なせてしまったことがひいては景公の非道な振る舞いを周辺諸国に知らしめるようになる。それが圉人の罪だと述べている。

この晏子の言葉が学習者にとって「罪」として認識・受容できるものかを考えさせたい。また、この問いでは「以馬之故」（馬を以ての故に）と二度繰り返されている。脚問で考えた「馬の価値」と「人の命」についての晏子の考えとともに扱い、晏子の意見を整理させたい。

なお、ここで指摘されている罪状は軽微なものから重大なものへと段階を踏んで説明されており、漸層法が使われている。漸層法は語句を重ねて用いることによって、徐々に詩や文章の意味を強めていき、読者の印象を絶頂に導き、最大の効果を上げようとする方法のこと。ここでは景公の心を動かすための論法として用いられている。

課題3 景公が圉人を許すことにはなぜか、まとめよう。

▼課題解決例

- ・ 諸侯からの評価、外聞を気にしたため。
- ・ 馬の命を人の命で贖わせるのは仁徳のある者の行いではないと、晏子の言葉によって気づいたから。

【課題設定のねらいと解説】

晏子は君主の私情による処刑の危険性を訴えている。群雄割拠の春秋時代

第2単元
第3教材

羅生門

◆芥川龍之介

採録のねらい

●資質・能力の観点から

物語の展開を把握する

高等学校国語科学習指導要領における「言語文化」科目の「B読むこと」にある、「ウ 文章の構成や展開、表現の仕方、表現の特色について評価すること。」の指導事項を達成するために、「羅生門」を取り取り上げる。物語の設定や構成を、表現に即して読み味わうとともに、関連する資料を使った読み比べや協働的な学習で読みを交流させながら、自分の解釈を深めることを目指す。

●テーマの観点から

おそらく戦後、これほど高校生に読まれてきた小説はないであろう。今も高校生の親の世代もほとんどが授業で読んだ経験をもっているはずである。しかし、社会の混乱の極限状況において、「盗み」という悪を、生活のためには許容する、といった反倫理的とも思えるこの作品が、なぜこれほどまでに教材として長い命を保ってきたのであろうか。

「羅生門」の主人公である「下人」は、家も仕事もお金も恋人も友人も、何ももたず、ただ「太刀」だけを持たされ、永年勤めた主人から解雇された。その「下人」が「羅生門」の楼上で老婆と出会い、「下人」は刃を突きつけて老婆の行動の意味を問う。何ももたない「下人」が執拗に問い続けるのは、

「意味」である。死体の髪の毛を抜く老婆は、「飢え死にをするじゃや、したなくする」と答える。そして「(この女も) 大目に見てくれるであら。」という弱者どうしの相互許容の論理。「下人」は冷やかな侮蔑をもって老婆の着物をそぎ取り、京の町の混沌へと向かって夜の闇の中へと駆け下りる。「下人」は老婆の言葉によって、あれほど憎悪した老婆そのものに生まれ変わった。それは歪んだ形とはいえ、少年である下人にとっては、大人になるための、社会に出て行くための通過儀礼であったのだ。

全てを失った若者が、人間性や人間社会の「意味」を問い返す現代の物語として、また私たち自身の変革の物語として読みたい。「下人」の心のありようを読み解いていけば、作品に描かれた、荒唐した「羅生門」の姿は、現代日本の都市の中核に、大きく影のように浮かび上がってくるであろう。

▼中心となる学習方法・学習活動

人物の心情や考え方の変化を追うことを通して、物語の展開を把握しよう。

衝動的ともいえる下人の心情・考え方の激しい変化は、平安末期の激動の社会変動に由来するものであり、この社会不安を背景として物語は展開していく。物語の結末は「下人の行方は、誰も知らない。」と作者芥川龍之介によって意図的に明示されない終わり方になった。しかし、「羅生門」における論理展開や人物設定の理解を踏まえて、作品の背後に広がることを想像し、学習者が続きを創作する活動を学習の中心におくことで、舞台設定・人物の心情・物語の展開の三者が有機的に連動することを深く理解させたい。

教材の概要

●作品

○主題についての考察

「羅生門」は輻輳したコードからなる多義的な意味を包含するテクストであり、それぞれの読者の読みによって全く異なる世界が開けてくる。したがってその「主題」や「意味内容」に関しては諸説ある。

古くは「下人の心理の推移を主題とし、あわせて生きんがために、各人各様に持たざるを得ぬエゴイズムをあばいている。」とした吉田精一説があるが、三好行雄はそれを進めて「エゴイズムなどという概念では決して律しきれない——日常的な救済をすべて断られた存在悪のかたち」を下人の姿に見、それを「人間存在そのものが永遠に担いつづけなければならぬ痛み」である、とした。「人間内部における矛盾の並存という命題」によって書かれたとする駒尺喜美の説。そして闇に消えていく下人にむしろ積極的な意味を見出し、「己を緊縛するものからの解放の叫び」に主題を見る関口安義の見方もある。結末部分で作者が行った改稿もまた読みに大きな影響を与えており、その是非に関してもさまざまな見解がある。吉田俊彦は、上記の関口の説を踏まえ、初稿における結末部の「京都の町へ強盗を働きに急ぐ下人の姿の中に」「他者中心」の抑圧体制からの人間解放を目指す作者の意気込みを見、しかしそれを、「下人の行方は、誰も知らない」と改稿せざるを得なかった芥川の中に「底知れない存在不安」を克服しえなかった闇を見いだしている。また新しくは、「語り手(書き手)」に注目し、「下人の行方はだれも知らない」と改稿された結末部において、「語り手」が、sentimentalismeを振り捨て、荒ぶる世界へと飛び出していった下人について語ることを放棄してしまった点を重視する長谷川達哉の見解もある。

「主題」を考える上で、主人公である下人の心理の移り変わりのストーリー分析からだけでなく、作品構造からの分析、さらに不気味な動物の比喩

や、不在性を表す表現から浮かび上がってくる負の世界である「羅生門」自体に象徴的意味を見いだすような読みなど、多面的な読みが存在しうる。「羅生門」の授業に際しては、予見にとらわれず、固定した意味に収斂させない自由な読みが保証される必要がある。

●表現の特色

1 構成

羅生門の下で途方に暮れていた主人公である下人が、羅生門の楼上で老婆と出会い、それを契機にまた、楼から駆け下りて闇の中へと消えていく。羅生門の楼上という異空間(境界)を通過することで変貌を遂げる下人の姿を、①門の下→②楼の上→③門の下という場の転換によって描き出している。

2 比喩

下人の変貌を決定づける「老婆」を中心に、「猿の親が猿の子のしらみを取るように」「肉食鳥のような、鋭い目」「からすの鳴くような声」「暮のつぶやくような声」など、気味の悪い動物の直喩を多用することにより、極限状況の中で理性や人間性を失い、まさに獣のように生きるしかない人間の生のありようを、読者の感性に直接的に訴えかけている。

また、この作品は直喩、暗喩、擬人法のほかにも、提喩、換喩等、多様な比喩表現に特色がある。

3 心象風景

「門の上の空が、夕焼けで赤くなる時には、それ(からす)がごまをまいたように、はつきりと見えた。」のように、血のような夕焼けの赤と死骸をねらうからすの黒の対比によって不気味さをきわ立たせるなど、風景描写を通じて主人公の心理を巧みに表現している箇所が多い。

4 その他

一匹の「きりぎりす」、主人公の「にきび」などの小物をうまく主人公の心理に結びつけて効果的に表現している。

学習指導の展開

●学習指導要領の指導事項（育成すべき資質・能力）

知識及び技能

言葉ア 言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解すること。

思考力、判断力、表現力等

読むウ 文章の構成や展開、表現の仕方、表現の特色について評価すること。

●観点別の評価規準

知識・技能

言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解している。

思考力、判断力、表現力等

文章の構成や展開、表現の仕方、表現の特色について評価している。

主体的に学習に取り組む態度

言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解したり、文章の構成や展開、表現の仕方、表現の特色について評価したりすることに向けた粘り強い取り組みを行うとともに、自らの学習を調整しようとしている。

●学習指導のポイント例（↓分冊①「総説編」50ページ参照）

(1) 「言語活動の充実」を踏まえた指導方法の視点

作品の背後に広がることを想像し、物語の続きを創作することによって「方法③概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする」ことを通して、「目標③事実等を解釈し、説明することにより自分の考えを深めること」の実現を目指す。

(2) 「言語能力の育成」を踏まえた指導方法の視点

物語の解釈や創作物をお互いに読み合って意見交流することにより、「⑤言葉によって感じたり想像したりする力、感情や想像を言葉にする力」、「⑥言葉を通じて伝え合う力」、「⑧考えを形成し深める力」、「⑩自分のものの見方や考え方を広げ深めようとする態度」の育成を目指す。

(3) アクティブ・ラーニングの手法を取り入れた指導方法の視点

「④グループディスカッション」を取り入れて、書いた文章をお互いに読み合い、意見交流をする。そのことを通して、自分の考えを伝え、相手の話を理解して、自分自身の考えを深めることを図っていく。

学習指導案

〇〇高等学校国語科 〇年〇組
授業者 〇〇〇〇

1. 学習活動 「羅生門」の続きを創作しよう
2. 教材名 「羅生門」・その他の関連資料
3. 学習目標 物語に描かれる人物や考え方の変化を追うことを通して、物語の展開を的確に把握することができる。
4. 評価規準

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
評価規準	言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解している。(言葉ア)	文章の構成や展開、表現の仕方、表現の特色について評価している。(読むことウ)	言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解したり、文章の構成や展開、表現の仕方、表現の特色について評価したりすることに向けた粘り強い取り組みを行うとともに、自らの学習を調整しようとしている。
観点別評価の実際	表現の仕方や表現の特色について評価しながら、物語の場面設定を正確に捉えている。〈記述の確認〉	作品の展開を捉え、自分の解釈やその根拠をまとめている。〈記述の分析〉	物語の展開を根拠にして、自分なりの見方や考え方を文章に表現しようとしている。〈行動の観察〉

5. 授業の展開 (3時間)

時	学習活動	評価
1	京都の町や羅生門の舞台設定に着目し、そこに描かれる当時の社会情勢と、羅生門の下の人のおかれた状況を整理する。	【知識・技能】表現の仕方や表現の特色について評価しながら、物語の場面設定を正確に捉えている。〈記述の確認〉
2	物語の設定を踏まえて、物語の展開や下人の心情変化を正確に読み取る。	【思考・判断・表現】作品の展開を捉え、自分の解釈やその根拠をまとめている。〈記述の分析〉
3	この結末を経て、下人と老婆はどうなったと思うか、「羅生門」の続きを短い文章にまとめて相互に読み合い、考えを交流する。	【主体的に学習に取り組む態度】物語の展開を根拠にして、自分なりの見方や考え方を文章に表現しようとしている。〈行動の観察〉

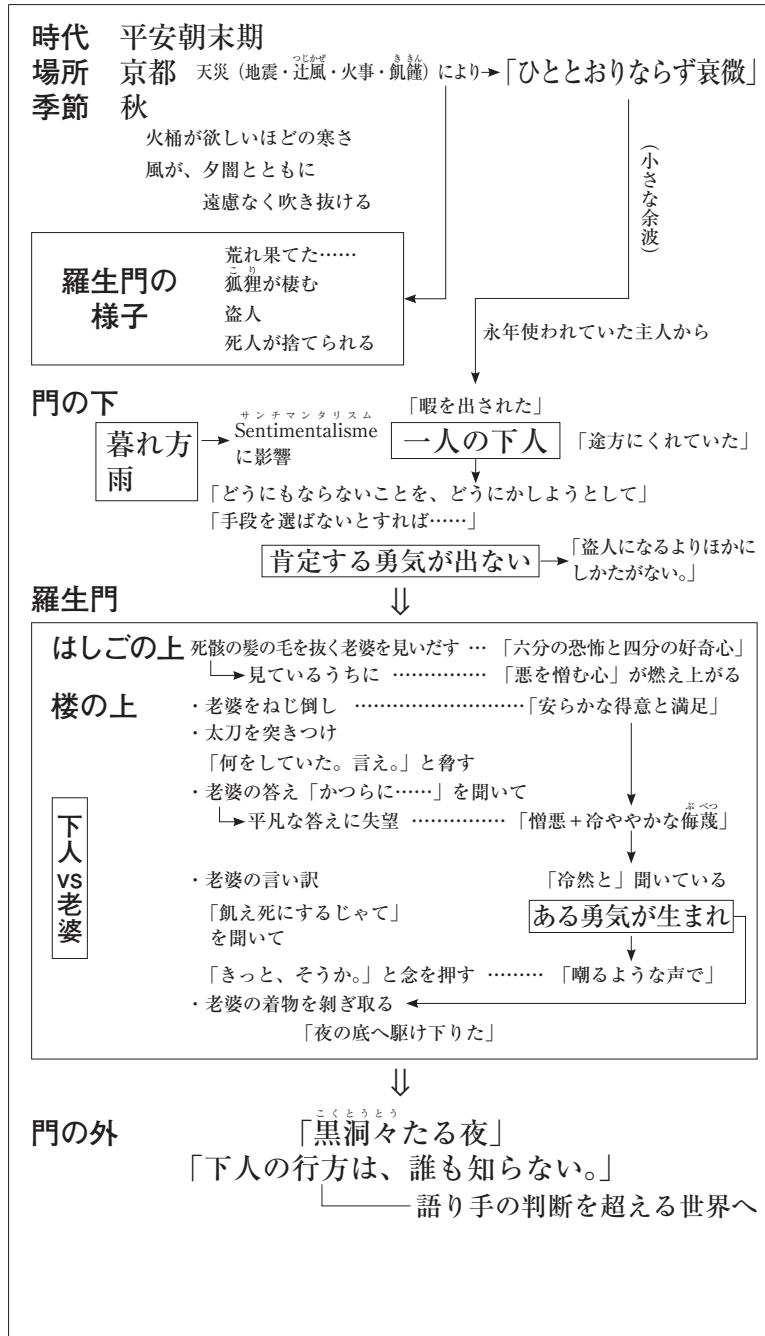
●学習指導案例 (3時間扱い)

●指導展開例

第1時限		時間
<p>本時のねらいと学習課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 京都の町や羅生門の描写の仕方や表現の特色について評価しながら、そこに描かれる当時の社会情勢と、羅生門の下で下人のおかれた状況について正確に捉えることができる。 <p>【学習課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 物語の舞台設定と人物設定を正確に捉えよう。 		<p>本時のねらいと学習課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 京都の町や羅生門の描写の仕方や表現の特色について評価しながら、そこに描かれる当時の社会情勢と、羅生門の下で下人のおかれた状況について正確に捉えることができる。 <p>【学習課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 物語の舞台設定と人物設定を正確に捉えよう。
導入	<p>1 全文を通読し、作品を七段落に分ける。</p> <p>2 「羅針盤 課題1」に取り組み。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 京都の町や羅生門の描写に着目して、そこに描かれている平安末期の社会情勢についてまとめる。 ○ 下人が羅生門の下に至るまでの経緯を整理する。 ○ 羅生門の下で下人がどのような状況にあるかまとめる。 	<p>指導上の留意点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 時間の経過や場所の移動に注目させる。 ・ P266「物語を読むためのキーワード」の「人物設定・舞台設定」を参考に、情報を整理する。
展開	<p>3 広がる読書「作家とよむ『今昔物語』」を読んで、当時の社会状況についてより具体的なイメージを膨らませる。</p> <p>4 自分が下人のような状況に陥ったかどうか、意見を交流する。</p>	<p>指導上の留意点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 芥川龍之介が古典を題材として「羅生門」を創作したことを確認し、古典の世界から近代文学へと継承される言葉の働きがあることに触れる。 ・ 下人が孤独で、安定した職も住むところもなく、空腹で、社会情勢が不安定であるため福祉や共助も期待できないことを確認する。
評価と方法	<p>知識・技能</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 表現の仕方や表現の特色について評価しながら、物語の場面設定を正確に捉えている。(記述の確認) <p>(支援) C 評価の生徒への手立て</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 個々の叙述を取り上げて下人が置かれた状況やその心理を確認させる。 	<p>知識・技能</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 表現の仕方や表現の特色について評価しながら、物語の場面設定を正確に捉えている。(記述の確認) <p>(支援) C 評価の生徒への手立て</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 個々の叙述を取り上げて下人が置かれた状況やその心理を確認させる。

第2時限		時間
<p>本時のねらいと学習課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 物語の設定を踏まえて、その展開や下人の心情変化を正確に読み取り、自分の解釈やその根拠をまとめることができる。 <p>【学習課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 設定を踏まえて、物語の展開や心情の変化を正確に読み取ろう。 		<p>本時のねらいと学習課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 物語の設定を踏まえて、その展開や下人の心情変化を正確に読み取り、自分の解釈やその根拠をまとめることができる。 <p>【学習課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 設定を踏まえて、物語の展開や心情の変化を正確に読み取ろう。
展開	<p>1 「羅針盤 課題2」に取り組み。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 表現を通して、下人の心情を正確に追う。 ① 「勇気が出ずにいたのである」 ② 「ある強い感情が、嗅覚を奪ってしまった」 ③ 「老婆に対する激しい憎悪が、少しずつ動いてきた」 ④ 「ある勇気が生まれてきた」 <p>2 「羅針盤 協働的な学びのために」に取り組み。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 下人の考え方はどのように変化したか。また、そのような変化をもたらしたきっかけはなんだったのか。話し合う。 <p>3 下人の心情の変化とそのきっかけを、マトリックスやフィッシュボーンなどの思考ツールを使って一枚の紙に簡潔にまとめて共有する。</p>	<p>指導上の留意点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ①～④を普通の表現に言い換えたものと比較することで、表現の効果や作者の工夫をより考えさせることもできる。 (例) ①決断はできなかったのである。 ②恐怖と好奇心が湧いてきた。 ③徐々に老婆が憎たらしく感じられてきた。 ④迷いはなくなった。 <ul style="list-style-type: none"> ・ P268「物語を読むためのキーワード」の「転換点」を参考に、下人の心情が何によってどう変化したかを整理する。 ・ 「現代の国語」での学習事項を活用させたい。
評価と方法	<p>思考・判断・表現</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 作品の展開を捉え、自分の解釈やその根拠をまとめている。(記述の分析) <p>(支援) C 評価の生徒への手立て</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ どのような表現技法や比喩が使われているのかを整理し、文脈に即して具体化させる。 	<p>思考・判断・表現</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 作品の展開を捉え、自分の解釈やその根拠をまとめている。(記述の分析) <p>(支援) C 評価の生徒への手立て</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ どのような表現技法や比喩が使われているのかを整理し、文脈に即して具体化させる。

●展開図



●語句・文脈の解説

〔72ページ〕

○第一段(初め〜76・11)の大意

羅生門の下で途方にくれる下人

平安時代末期の、ある日の暮れ方、一人の暇を出された下人が羅生門の下で雨やみを待っていた。途方にくれた下人は、羅生門に一夜の宿を借りようと楼の上へ登るはしごに足をかけた。

1 ある日の暮れ方のことである。一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待っていた。物語性をもった起句である。「ある日」と日を特定せずに入る。読者の想像をかき立てるとともに、短いセンテンスの中に「いつ・どこで・だれが」の最低限の情報提示されている。芥川作品には、「蜜柑」「杜子春」「神神の微笑」など、夕暮れの設定から入るものが多い。

1 下人 身分の低い者。貴族などに仕えて種々の雑役にあたった者。また、『日本国語大辞典(第二版)』(小学館)によると、「平安以後の隷属民。荘園の地主・荘官や地頭などに隷属して、家事、農業、軍事など主家の雑役につかわれ、財産として土地といっしょに、あるいは別々に売買賃入や譲渡の対象となった。」とある。この作品の「下人」も、まだ若いのに暇を出されるまで「永年、使われていた」(74・10)こと、帰る家もないことなどを考えると、人身売買で売られてきたとも考えられる。原典である『今昔物語集』では「盗セムガ為ニ京ニ上ケル男」とあり、また、下書きノートや推移稿では「交野(の)平六」と固有名詞になっていたのを、最終稿で「下人」とした点に、結末部分の改稿と並んで、作者の意図が感じ取れる。また、太刀を持っていったところから、貴族や豪族等の警護にあたった侍とも考えられる。

1 羅生門 平安京の正門。羅城門。本来は「羅城門」と表記したが、江戸時代以降「羅生門」も使われるようになった。「羅城」とは古代中国の都を開んでいた外郭のこと。平安京には羅城は築かれなかった。「平安京略図」(73ページ)、「平安京条坊図」(300ページ)参照。

3 丹 朱色の塗料。「丹塗り」とは赤色の顔料である丹または朱で塗ってあること。丹は鉛に硫黄と硝石を加えて焼いてつくったもの。朱は辰砂として産し、成分は硫化水銀。

4 きりぎりす 原文は「蟋蟀」とあり、古語では「こおろぎ」を意味しているが、柱に止まっている点、習性から今言う「きりぎりす」に解するのが自然だろう。無人の強調、周囲が寂れている雰囲気、

脚問・発問

〔72ページ〕

● 最初の一行「ある日の暮れ方のことである。一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待っていた。」で提示されている4W(いつ・誰が・どこで・なにを)を指摘しよう。

・ いつ ある日の暮れ方
・ 誰が 一人の下人が
・ どこで 羅生門の下で
・ なにを 雨やみを待っていた

● 「羅生門が朱雀大路にある以上は：市女笠や搦烏帽子が、もう二、三人はありそうなのである。」(4)とあるが、どういうことか。

・ 「市女笠や搦烏帽子」(5)とはここでは「この男(下人)の外にも」と下人と同列に扱われているので、貴族などではなく、一般の女と男のことを比喩(提喩)として言っていると考えられる。「もう二三人はありそう」なのは、羅生門が平安京のメインストリートである朱雀大路にある以上は、本来ならもっと賑わっていても良いはずだからである。

● 主人公の下人の身なりや外見はどうか、指摘しよう。

季節などを暗示する絶妙な小道具として使われている。色彩の面から見ても、「丹塗りの円柱」の鮮やかな朱色と補色関係の緑の方が合う。

4 朱雀大路 平安京の中央を南北に貫く大通り。「平安京略図」(73ページ)、「平安京条坊図」(300ページ)参照。京のメインストリートで、道幅は八十四メートル。

5 市女笠 菅や竹皮で編んだ笠。ここでは、それをかぶった女性のこと。もとは市女(市場で物を売る女性)が用い、のちに、女性の外出用に多く着用された。

5 揉烏帽子 柔らかくもんだ烏帽子。ここではそれをかぶった男性のこと。男性が平常服の際に着用した。

7 辻風 つむじ風。旋風。
8 洛中 都の中。平安京の市中。「洛」は中国の都「洛陽」に由来する。↓洛外

「73ページ」

1 旧記 古い記録。「方丈記」に同じような記述がある。ここにあるような記事は『方丈記』(鴨長明・一二二年)に、「あやしき事は、薪の中に、赤き丹着き、箔など所々に見ゆる木、あひまじはりけるを尋ねれば、すべきかたなきもの、古寺に至りて仏を盗み、堂の物の具を破り取りて、割り砕けるなりけり。」とある。『方丈記』の該当部分ではできれば生徒にみせておきたい。

【話題源】

○「方丈記」に描かれた天災

「方丈記」には、元暦二(一一八五)年七月九日、近畿地方を襲ったマグニチュード7クラスの地震について書かれてある。東日本大震災を髣髴とさせる記述である。また、辻風、火事、飢饉についての記載もある。古文書から先人の経験を学ぶことは大切だ。

……

〈元暦の大地震〉

「大地震ふること侍りき。そのさま世の常ならず、山は崩れて河を埋み、海は傾きて陸地をひたせり。土裂けて水湧き出で、巖割れて谷にまろび入る。…都のほとりには、在々所々堂舎塔廟ひとつとして全からず、…」

〈治承の辻風〉一一八〇(治承四)年

「中御門京極のほどより、大きな辻風おこりて、六條わたりまで、吹ける事侍りき。三四町を吹きまくるあひだに、こもれる家ども、大きなも、小さきも、ひとつとして破れざるはなし。」

〈安元の大火〉一一七七(安元三)年

「風烈しく吹きて、静かならざりし夜、戌の時ばかり、都の東南より火出で来て、西北に至る。はてには、朱雀門、大極殿、大学寮、民部省などまで移りて、一夜のうちに塵灰となりき。…惣て都のうち三分が一に及べりとぞ。男女死ぬるもの数十人、馬牛のたぐひ辺際を知らず。」

〈養和の飢饉〉一一八一(養和元)年～一一八二(養和二年)。

「二年があひだ、世の中飢渴して、あさましき事侍りき。或は春夏ひでり、或は秋大風、洪水など、よからぬ事どもうちつづきて、五穀ごとくならず。…京のうち一條よりは南、九條より北、京極よりは西、朱雀よりは東の路のほとりなる頭、すべて四万二千三百余りなんありける。」

『新編日本古典文学全集44』神田秀夫他(一九九五年 小学館)

4 狐狸 狐と狸。人を騙す妖怪と信じられた。

5 引き取り手のない死人を、この門へ持つてきて、捨てていくという習慣さえできた「引き取り手のない死人」とはどういう死人であろうか。例えば道ばたで野垂れ死にした身元不明死体等であろう。この物語に登場する「下人」も、「老婆」も、恐らく死ねば同じ扱いを受けることになるであろう。

6 日の目が見えなくなると、暗くなると。「日の目」は日の光。

7 足踏み 足を踏み入れること。

11 鴟尾 宮殿・仏殿などの棟の両端に取り付けた魚の尾の形の飾り。

12 門の上の空が、夕焼けで赤くなる時には、それが胡麻をまいたように、はつきり見えた 羅生門の全景描写であるが、高い鴟尾の周りを飛ばからすがごまのような黒い粒にしか見えな、という描写は羅生門の壮大さを表現し、また、夕方の赤い血の色のような空に舞う黒いからすの不吉なイメージと、それを背景に浮かび上がる羅生門は、巨大な黒い影となって我々の脳裏に焼きつく。この小説におい

① 右の頬に大きなきびがある。
② 洗いざらした紺の襖を着ている。
③ 山吹の汗疹(黄色の汗取り用の下着)を着けている。

④ 聖柄の太刀を腰に下けている。
⑤ わら草履を履いている。

⑥ 「この男のほかには誰もいない。」(6)のはなぜか。

・ 京都の町がうち続く天災で衰微し、羅生門が荒れ果てて狐狸などが住み、死体が捨てられていくような不気味な場所になってしまったため、夜になるとだれも気味が悪くて近づくなくなってしまうから。

⑦ 「この二、三年」(7)とはどの時点から見ての二、三年なのか。

・ 「ある日の暮れ方」の「ある日」
・ 「洛中」(8)とはどこのことか。

⑧ 京都の町の中のこと。
(解説) 上段の解説参照。

「73ページ」

⑨ 「旧記」(1)とは何か。また、いつの時点から見ての「旧」なのか。

・ 旧記とは『方丈記』のことである(上段の解説参照)。「地震・辻風・火事・飢饉」の記録がある。

・ 作者の執筆時点から見ての「旧」。(物語の現在からではない。この物語の舞台と

なった平安朝末期はもちろん『方丈記』より前である)。

(解説) この小説の語りの方は、「語り手」が主人公の下人に寄り添うように、下人と同じ時代、同じ場所から語るといいう方法を取っており、冒頭であれば「平安時代の」ある日の暮れ方」が物語の中の現在である。しかしこの物語は作者芥川が、過去形の昔物語や歴史小説といった形式ではなく、平安朝に場を借りた近代小説として描いているために、時折執筆当時に現在とする描写が入ってくる。

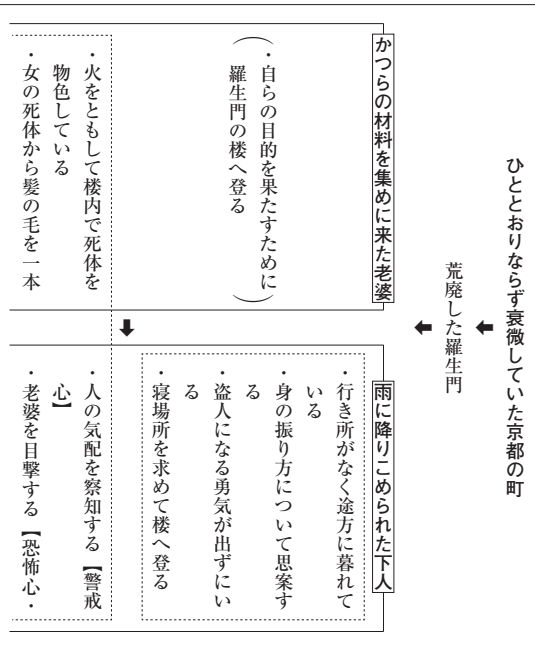
⑩ 「そのかわり」(8)とあるが、何のかわりか。
・ 人々が羅生門に近づかなくなったかわりに、ということ。

「74ページ」

⑪ 「右の頬にできた、大きなきびを気にしながら」(4)とあるが、これはどういうことを表しているか。

・ 「なきび」は、まだ精神的に未熟な若い下人の象徴的な表現。主人公が恐らく未だ十代の若者であることを示すと同時に、絶えずにきびに手をやって気にしている下人の姿からは、あてのない、どうしようもない現状に対する不安が感じ取れる。

⑫ 74ページの文章の中で、「語り手」が平安



（協働的な学びのために）
下人の考え方はどのように変化したか。また、そのような変化をもたらしたきっかけはなんだったのか。話し合おう。
その際、「物語を読むためのキーワード」の「転換点」も参考にしよう。
資料編 268ページ

【課題設定のねらいと解説】
重要な場面における下人の心情を表現に即して読み取る課題である。「羅生門」は、下人の心情の移り変わりが中心として描かれる作品であり、ここを整理することで、作品の展開そのものを整理することもできる。
課題として取り上げる①④は、下人の心情が移り変わる起点となる場面である。それまでの心情が何であったかと、何によって、なぜ、どのようにその心情が変わっていったかを生徒に考えさせたい。

課題3 「なるほどな、死人の……」（82・9）と話したす「老婆」は、自分が行ってきたことについてどのようか考えているか。まとめてみよう。

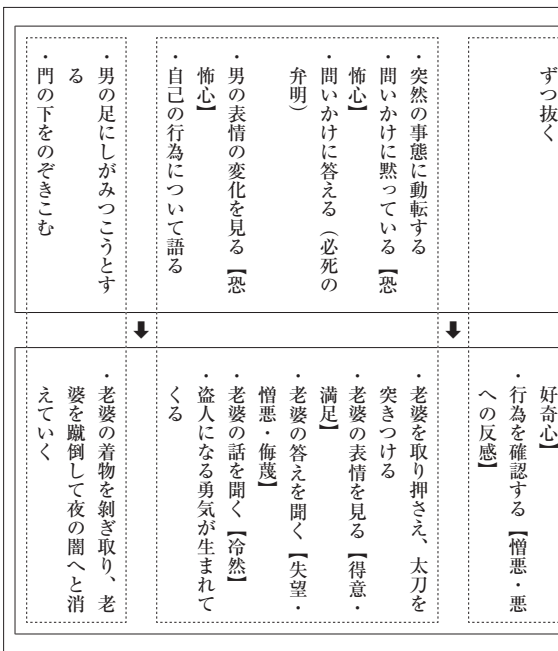
▼課題解決例

老婆の発言は次の二点に整理できる。

① 羅生門に捨てられている死人たちは、みな、生きていた時に悪いことをしてきた人間ばかりである。したがって、羅生門の死人たちは、髪の毛を抜かれてもしかたのない人間である。よって、自分のしたことは悪いことではない。

② 蛇を干し魚だと偽って売っていた女は、そうしなければ飢え死にをするので、しかたなくそうしたのである。したがって、それは悪いことではない。また、自分が死体の髪の毛を抜いたのも、そうしなければ飢え死にするので、しかたなくしたのである。よって、自分のしたことも悪いことではない。

その老婆の発言——特に②に相当する部分——を受けて、下人には「勇気」——自分が何ができるかを発見した者に生ずる勇気であり、悪を行うことを積極的に肯定する勇気——が生じ、「では、おれが引剥ぎをしよう」と恨むまい



な。おれもそうしなければ、飢え死にをする体なのだ」という発言と、引剥ぎの実行となって表れた。
老婆の発言を受けた下人の心情、それに基づく発言と行動について整理する。

【課題設定のねらいと解説】
ここまでの学習を生かして、表現から老婆の心情や意図を読み取る力を伸ばすことができるよ。

【課題設定のねらいと解説】
ここまでの学習を生かして、考え方だけでなく、その変化をもたらしたきっかけとともに整理させたい。

探究的な学び
この結末を経て、下人と老婆はどうなったと思うか。意見を出し合おう。

▼課題解決例

- ・下人も老婆も生きるために盗人になり、自己の悪を正当化する論理で暗躍した。
- ・下人は京都の外で盗賊になり、老婆は下人ほどの悪にはなりきれないまま、死人の髪を抜くような生活を続ける。
- ・下人は盗人になったが、下人より強い悪によって悪を成される側となり、悪の弱肉強食が連鎖した。
- ・ふてぶてしく生きることができる老婆は、このあともためらわずに悪の道を進んだが、流されやすい性格の下人は、すぐまた自分が悪の道に進むことに疑念を感じ始めた。

【課題設定のねらいと解説】

「下人の行方は、誰も知らない。」と結ばれていることから、下人はその後どうなったのかという問題については、全て読者に委ねられており、生徒は自由に発想を広げることができるだろう。ただし、疲弊した都に下人の再就職先や、下人を受け入れる家族のような存在が唐突に現れるとは考えづらい。「悪に対しては悪を成してもよい」といった老婆の論理や、下人の変化しやすさといった本文の読解、歴史・社会状況を根拠に、関連な議論を期待したい。なお、その際、末尾の一文の改訂の問題や、芥川龍之介の短編「偷盗」などを、参考にするのもよいだろう。

また、下人の側からしか語られてこなかったこの小説において、結末近い部分になってから「語り手」の視線は下人を離れ、老婆の側に立つ。今まで

学習の振り返り

- 物語の展開を的確に把握することができたか。…①
- 人物の心情や考え方の変化について話し合うことができたか…②
- 新たに気づいたことや考えたこと、これから深めていきたいことなどを書き出そう。…③

【学習の振り返り】設定のねらい】

教科書には①～③の番号は付していないが、ここでは便宜的に番号を付け、次のようなねらいがあることを示したい。

- ・振り返り①……教材の「身につけたい言葉の力」(能力目標)である「物語の展開を把握する力」に対応する振り返り
- ・振り返り②……教材の「中心となる言語活動」(学習活動)である「人物の心情や考え方の変化について話し合う」に対応する振り返り
- ・振り返り③……この教材の学習を通した「主体的に学習に取り組むこと」についての振り返り

いずれも「学習者自身が行う自己評価」であり、授業者が行う「学習評価」ではない。学習者自身が自分の学習に対して、成果と課題を意識し、次の学習へとつなげる意欲を喚起することをねらいとしている。

とは視点を変えて、老婆の側からこの物語の続きを考えるとどうなるのか、生徒の意見もさまざまだろう。「コラム 羅城門には鬼が棲む」の内容や、老婆の行動や表情、言葉を思い出しながら、多様な意見を期待したい。

語彙を広げる

○比喩

比喩とは、物事の説明に、類似したものを借りて表現する技法である。

「雨やみをする人々が、もう二、三人はありそうなものである」と書かずに「市女笠」や「採鳥帽子」という換喩(メトニミー)を用いることによって、平安時代の庶民の風俗や男女の区別を説明的にならずに描写することができる。また、松の木は火つきがよいため焚きつけとしてよく用いられる一方で、火持ちは悪く、長時間燃やし続けることはできない。その松の木切れの火に、下人の心情を喩えることで、先ほどまで必死に苦悩していた問題であったにもかかわらず、急に「あらゆる悪に対する反感」を増幅させていく下人の心情も、このあとすぐに変わってしまうであろうことが暗示されている。

○擬人法

擬人法とは、動物・事物あるいは抽象概念などの人でないものを、人に見立てて表現する修辞法である。「羅生門」ではこの技法が多く用いられている。「雨音がする」ではなく、意志をもった存在として雨が羅生門を包み、雨音を集めてくるように表現することで、下人が必然的な展開で精神的にも身体的にも羅生門に閉じ込められていることを暗示することができる。

また、その意識(老婆の生死は自分が支配しているという優越感)が、老婆に対する憎悪の心を冷ましてしまったという表現は、下人が理性に従って自分の感情をコントロールしているのではなく、突発的なできごとや感情に左右されて生きている存在であることを表現している。

【話題源】

○さまざまな比喩の形

「羅生門」は比喩の宝庫である。いろいろな種類の比喩表現の形を覚えておこう。

- ①直喩(～のよう)
「胡麻をまいたように、はつきり見えた。」 (73・13)
- ②暗喩(隠喩)
「急なほしこを夜の底へ駆け下りた。」 (84・9)
- ③擬人法(活喩)
「門の屋根が…重たく薄暗い雲を支えている。」 (75・5)
- ④換喩「市女笠」
↓女性「一般の代表的なものとして「市女笠」と表現。
「雨やみをする市女笠」 (72・5)
- ⑤提喩「白い鋼の色」↓「刃」のかわり。
「白い鋼の色を、その目の前へ突きつけた。」 (80・15)